

# 風は碧く 空へ抜け

「小説的な何か」  
※競馬小説じゃありません

「2010年7月18日のいろいろ」  
※競馬場に行った顛末

みさとあきら



cage製作

## menu

---

menu

..... もくじのつもり

臨場

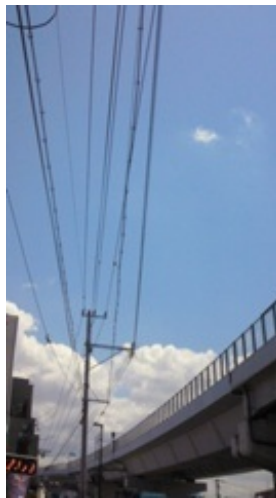
..... 掌編小説 夏の暑さのノスタルジー

2010年7月18日に小倉競馬場へ行った顛末

..... タイトルそのまま ぐだってるところが売り

旅立ったキミへの手紙

..... 捧げる詩



テキストデータは「みさとあきら」に、画像は「c a g e」によります。

みさとあきらの小説置場のメインブログはこちら → <http://note25page.seesaa.net/>

## 臨場

---

「俺らはいつでも臨場なんだ」

陽炎のぼるアスファルトを歩きながら、男の方が言う。アシンメトリーショート黒髪は休日なので立たせている。細い体には白地にピンクストライプの半袖シャツに、細身の黒ジーンズ、履き古した赤いコンバース。少し離れた左を女が歩く。

「臨場。場に臨む。日差し痛い」

つばの広い白い帽子を被った女が呟くように言う。大きなサングラス、化粧気はない。ダークブラウンのショートボブ。タイトな黒いロングTシャツ、インディゴのジーンズ、ナイキのスニーカー。白いストールと小さめのカゴバッグも。

二人ともそれぞれコンビニ袋を手に提げ、男の方にはビールと水、女の方には烏龍茶が2本入っている。

20代後半の2人は恋人ではない。友達とも、たぶん、違う。一番近い言葉は「元チームメイト」。同じ高校の陸上部だった。とはいえ、男子陸上部と女子陸上部は便宜上別の部であったし、高校時代の2人は一緒のクラスになったこともなくほとんど言葉を交わしたことがない。男の方は、背が高くはないが走り高跳びをしていた。女の方は、短距離の補欠だった。

再会は、今年のインターハイ県予選が終わってからの「監督還暦祝賀会」だった。監督に教えを受けた部員に招待状が送られたはずであったが、同じ学年で出席したのは2人だけだった。学年が3つ違えば知らない人ばかりの中で、見たことのある顔はそれだけで懐かしかった。2人とも実力は大したことがなかったけれど、あの夏は輝いていた。

会話の中で、2人とも実家を出ていないこと、高校で陸上を辞めたこと、土日は仕事が休みであることを互いに知った。女の方が「再来週、記録会があるんだって。暑いのによくやるよねえ」と羨ましげに言い、「そうなの？ 観戦に行こうかな、どうせ暇だし」と男の方が返した。携帯のメールアドレスを交換し、祝賀会が終わった。監督は相変わらず真っ黒に日焼けしていて健康そうだった。

\*\*\*\*

土曜日、つまり昨日の夜、女から男へメールが送られた。

明日11時着の電車で行くつもりだけど、  
駅から一緒に行くなら返信ください。

1時間半後に、男から女へメール。

じゃあ、東口のコンビニで。  
俺はチャリで駅まで行くから、  
電車着いたらメールよろしく。

\*\*\*\*

「確かに暑いね。俺も帽子持ってくればよかったなあ」

「夏は嫌いじゃないけどね。ただ、もういい年だからさ、紫外線がさ、ね」

「年とか言ったら俺、姉貴に殺される」

「あ、お姉さんいるんだ？」

小さく2つの笑い声。空は快晴。一片の雲もない。じりり、と音を立てそうな日差しが降り注ぐ。競技場が見えた。選手と思しき少年が幾人かジャージ姿でうろうろしている。

「カップルとか思われるかなあ」

「迷惑っ」

「こっちもだって」

「えええ？」

他愛もない、くだらない、中身のない会話。男は声を出すことを楽しみ、女は無駄であることが愛おしい。笑い声。

メインスタンドのスタート側に2人は落ち着いた。かろうじて日影。

「まさに、舞台に臨む感じだね。ココ」

「だねえ。うわあ、スタートの緊張思い出しちゃうよ」

男子110Mハードル予選が始まるところで、黒くしなやかな選手たちが集まっている。彼らを見る女の目は、けれど彼らを見ているわけではない。彼らに「高校時代の自分」を投影し、「過去の自分」を見つめている。男も彼らに目を向ける。引き締まった筋肉と、集中を高める為の屈伸や腿叩き。男もまた、彼らを通してかつての夏を思い出す。

「臨場」

男が口に出す。

「りんじょう」

女が繰り返す。

言葉は、ただ2人の意識を「現在」に繋ぎ止める為だけに発される。声を出していないと「過去」に行ってしまう、もう戻って来れない気がしている2人。戻って来れなくたって、たぶん誰も、当人たちさえも困らないけれど、それはきっと「しちやいけない」ことであるという認識が離れない。

「臨む」

今、その瞬間に。

「のぞむ」

この先を、未来を。

――位置について

予選で選手紹介のアナウンスは流れない。スタート地点のスピーカーからスターターの声。

――用意

パン。と乾いた音。スターティングブロックから弾けた8人が駆け出す。男のかつての姿ではなく、女のかつての姿でもない。スムーズなハードリングで8人は前を過ぎ去り、後姿となる。ゴールを切ったようで、順に肢体が緩んでゆく。見つめる2人は現在に引き戻される。

「若いねえ」

「俺らも若かったんだけどね」

太陽は天辺に近付き、グラウンドを焼いてゆく。気温は上昇を続け、日影でも汗が滴る。不快ではない。次の組がスタート準備を始める。

「来てよかったわあ、うん」

「何それ、ノスタルジ的な意味で？ ふふ」

今に身を置き、意識が飛び回る。過去と未来と。礎としての共通点、2人は互いをほとんど知らないけれど、似たも

のを見てきたらしい。

「あたしはマイルリレー終わってから帰るけど、どうする？」

「それほとんど終りじゃない。俺も最後まで居ようかな」

フィールドの緑。強い青色の空。赤いトラック。白い光。

2人はココに居る。ココに居た。熱く緩く、風が流れている。

2010年7月18日に小倉競馬場へ行った顛末

---

2010年7月18日日曜日。

小倉競馬に行ってきました。

9時過ぎに家を出て、ゆらゆらゆらりと小倉競馬場着が12時くらい。

入場して、まずオグリキャップの献花台を、と。

中に入ってすぐにありました。

小さい祭壇だったけど、花やニンジンやリンゴが山積み。

買っていったリンゴを供えて手を合わせました。

んで、競馬新聞を買って、競馬モードに。

と言っても、ワタクシそんなに詳しくないんですよー。

5Rを買うのは間に合いそうになかったので、

新潟メイン アイビスサマーダッシュ を買う。

小倉5Rもしっかり観て、6Rのパドックへ。

ああ、そうそう。

この日は「1回も」オッズ見てないんですよ。ははは。

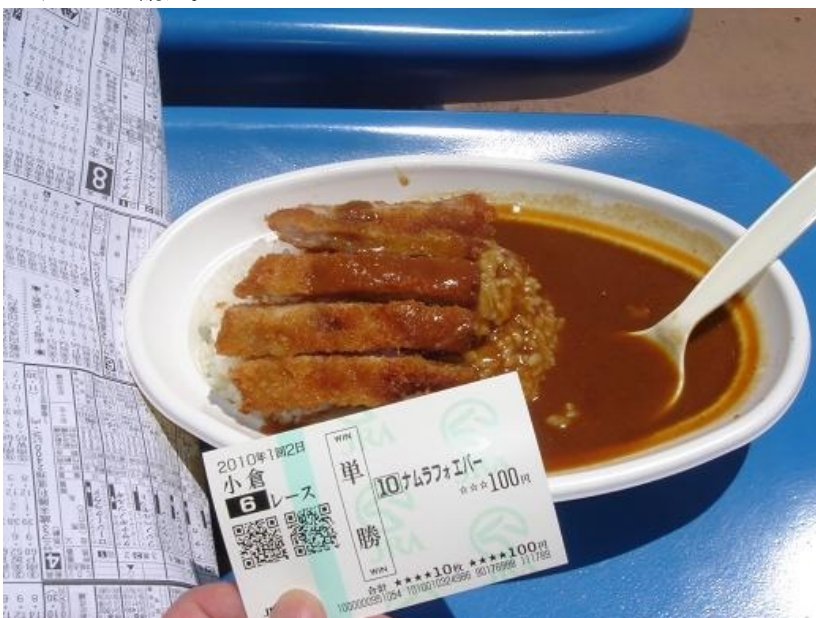
あと、どうも1年前（同じレース開催日）に小倉競馬来てみたいなんです、その時の倍くらい人がいた感じ。

晴れてたせいですかねー？ ちなみに1年前は午前中小雨が降ってました。

パドックで買う馬を決めて、馬券買って、

「お腹すいたなあ」

と、カレー購入。



まあ、負けました。カツカレーだったのに。

7R。

パドックで運命が。（大袈裟）4番ノヴェルデザイン号。





ちょっとさあ、買わずにいられないじゃないのよその名前！

パドックとスタンドを行ったり来たりしながら、写真撮ったり馬券買ったり。

あと、トイレと喫煙所とジュースの自販機。

とにかくまあ、当日はものすごーーーーーく暑かったです。



↑「ああ！ 何か白い！」とか思ったら誘導馬だったり。↑



↑走ってる馬って綺麗だよねえ。↑



↑なんだかピントが合っていないのが哀しい。↑





↑これもピントが。でもシルエットがいいからよし。↑  
↓これ何かに使えないですかねえ?↓



9Rで12番の単勝握りしめてスタートを待ってたら、  
「一点買い? すごいね」  
と、知らないおじさんに話しかけられる。





おじさんが馬券見せてくれて、12番絡めた馬単をいくつか買った。

10R釜山ステークスで、自分的にすごくいい写真が撮れた。



で、アイビスサマーダッシュはと言いますと。  
カノチャーン。涙。  
以上。

最終まで居ると帰りが遅くなってしまうので、そこで小倉をあとに。  
いやはや、お疲れ様でした。>自分

勝ったのは釜山ステークスだけでしたわぁ。写真は単複ですが、馬連も。



## 旅立ったキミへの手紙

---

現役時代のキミを、リアルタイムでは知らない。  
たぶん、何度かテレビのニュースで目にしたくらい。

私の葦毛好きは、キミの影響だよ。

キミが凄かったってことをいろんな人から伝え聞いた。  
現役時代の動画を観て、とっても興奮した。

お疲れ様。

リンゴ、嫌いじゃなかったら食べてくれると嬉しいな。

オグリキャップへ